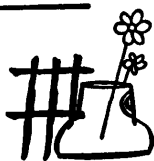


巻頭言



30周年を迎えて

戸田 巖†



明けましておめでとうございます。また本年は本学会も創立 30 周年を迎える年でもあり、重ねがさねおめでたいこととお慶び申し上げます。

情報処理という言葉が広く使われるようになったのはコンピュータの登場後間もなくで、30 年前本学会の名称に採用されたのもこの言葉の普及に大いに力があつたと思います。

情報処理の学問、技術、産業はこれまで日進月歩の勢いで進歩して参りました。30 年たった今でもその変化のスピードは衰えをみせていません。その理由の一つはつぎのようなことだと考えます。すなわち最初の 20 年はコンピュータの技術自体が急速に進歩し、後半の 10 年では通信とワークステーションの技術が大きく変貌していることによると思います。

この結果情報処理の関係者は、この 30 年休む間もなく新技術の開発や吸収に追われることになりました。

新知識の普及には情報処理学会が大きな役割を果たしました。この結果学会自体も急速な発展を遂げ、現在その会員数は 3 万人を超えるに至っております。

しかし、創立 30 年を迎え本学会も大きな転機にさしかかっております。すなわち、会員の伸び率が低下してきております。また、本学会から多くの小学会が分派し始めました。これは今まで他の大学が成熟と共に辿った道でもあります。

しかし、情報処理技術の発展のスピードは、まだ衰えてはいないと思います。したがって学会の発展の停滞は技術の成熟ではなく、本学会の現在の形態が情報処理の発展と共に多様化した会員の期待に応えられなくなってきたのが原因であると思います。

これは企業 30 年説に似た現象です。いかに優良な企業でも 30 年たつと衰退する、したがって抜本的なリストラクチャリングが必要になるという説であります。

この意味では、本年は学会誕生 30 年を祝うと同時に

に、今後の学会運営の大胆な改革を決意すべき年だと思えます。

初心に立ち戻り学会とは何かという問題を問い直してみる必要があります。学会は英語では Society であり共通の興味を有する個人の任意団体の意味を持ちます。情報処理学会は情報処理に関心のある人たち全体の団体でなければならず、情報処理の学問に興味のある人たちだけの団体ではありません。

情報処理の応用が広がれば広がるほど会員の興味の幅が広がります。また、情報処理の技術が深化するほど会員の興味のレベルも多様化します。

最近の情報処理の発展の特徴は、応用分野の拡大とシステム形態の分散処理への移行にあると思えます。

このため情報処理の専門家でない情報処理従事者が急速に増加しています。この人達の興味を満足する学会に発展していく必要があります。一方、学問的興味としては neuro-computing, object-oriented database 等も登場しています。これらの分野の研究者の興味も満足できる学会でなければなりません。

このように会員の必要とする情報は多様化しています。会員の学会での活動の自由度と学会が会員へ提供する情報の選択の自由度をもっと大きくすることが、学会のさらなる発展に必要と思えます。

このためには、学会の基本的な活動である学会誌、論文誌の発行、研究会や大会活動等の見直しが必要と思えます。

また、このような活動を支えるためには、学会の財政基盤を強化することもきわめて重要です。

幸い一昨年から活動を続けている 30 周年記念の未来委員会がこの方向の報告を作成しています。この報告を尊重して学会の運営に思いきった改革を加えて行くべきだと思います。

改革について会員諸君の積極的な提案と支援、及び今後の学会活動への積極的参加をお願いします。

(平成元年 11 月 8 日)

† 本会副会長 日本電信電話(株)